柿沼さん、突然のお手紙、すいません。

ブラウン管越しには何度も伝えているのですが、直接、僕の想いを柿沼さんに伝えたくて、こうして手紙を書かせてもらいました。

先に謝っておきます。

字が汚くてごめんなさい。でも、ゆっくりと、丁寧に書きます。

先に謝っておきます。

文章が長くてわかりずらくてごめんなさい。こうして誰かに向けて手紙を書くのははじめてで、そして、想いが強すぎて、うまくまとめる自信がありません。

いつからだろう？

番組を観ている最中、視界の端に映っていたあなたが、気づいたら、真ん中に映るようになったのは。僕の視線が、矢部さんやマツコさん、ゲストの方ではなく、あなたに向けられるようになったのは。

たまに、柿沼さんが番組に出ていない時や、姿はあっても話しをされない時があります。

そんな時、僕はさびしくもあり、うれしくもあります。

さびしいのは、あなたの声を聞けないから。

うれしいのは、他の誰かに、あなたの存在を知られる心配がないから。

わたしのどこが好きなの？

もしかしたら、柿沼さんは不思議に思っているかもしれません。

僕も不思議です。説明ができません。

こんな風にして理由もなく、突然、人に恋をするのははじめてです。

でも、もしかしたら、今までしてきた恋は恋ではなく、恋のようなものだったのかもしれない。

だってそうでしょう？

恋に限らず、説明できるものなんてたかが知れている。

ピカソの天才性も、ダリの奇抜性も、説明できるものではない。でも、彼らは本物。

僕の柿沼さんに対する想いも、本物だからこそ、うまく説明できそうにないのです。

でも、ひとつだけ言えることがある。

僕は、柿沼さんのことが好きです。いや、好きだにゃー。

想いがあふれそうだから、この辺りでペンを置くことにします。

寒さか厳しくなってきましたね。

体調、お気をつけください。